第 4 章

調査研究

1　研究の概要（調査研究）

（１）研究主題

キャリア発達を促すためのカリキュラム・マネジメント
～新しい職業学科として社会に開かれた教育課程の構築を目指して～

（２）設定理由

平成 26 年度の調査研究において、進路指導部が「青年学級」や「同窓会一泊旅行」などの機会を利用して卒業生の実態や生活の様子の聞き取り調査を行った。その聞き取り調査の結果をもとに就労における卒業生の就労状況から、本校での学習が卒業後の生活にどのように関わっているかをまとめ、調査研究として報告し、教育課程の編成に寄与した。また、「今金町キャリア教育・職業教育研究フォーラム」「今金町障がい者雇用事業者連絡会」に進路指導部も参加して、学校評議員や雇用主の方々の意見から、卒業生の実態や問題を把握し、本校の教育活動に必要な内容や教育課程上の課題を進路指導部内でまとめた。

これまでの取り組みから、教員の就労に対する知識や認識の向上、意識改革を目指すべく、学校内でできることが何かを進路指導部内で話し合い、まずはできるところから着手していくことで教職員の校内での進路に対する認識を変えていくことができるのではないかと考え、昨年度も調査研究を行った。その結果、具体的な取り組みとして、「個別実習の事前事後学習の整備」、「担進会議の実施」、「進路指導の手引き作成」、「職員室内掲示板の充実」、「進路コーナーの新設」、「廊下掲示板の刷新」を行い、「見えるテーマ」を掲げ継続したことで、各項の取り組みからも一定の成果が得られた。

これらの取り組みについては、最新の情報を盛り込みながら、継続していくことこそが、生徒と教員の進路に関する知識、理解、関心を高めること、就労先から求められる人物の育成、さらには障がいに対する専門性の向上などにつながるものと考える。

一方で、教職員のみへの発信に終始する傾向や、情報の煩雑さ、学校での取り組みと就労先での取り組みとの関連性のわかりにくさ、進路に関して多岐にわたる要望があるなどの課題も出た。

以上のことから、今年度については、昨年度の調査研究での課題となった点について改善を図ることと、昨年度の成果を深化させていくことに焦点を当てた研究を進めることとした。「課題点の改善」と「成果の深化」を図ることにより、社会に開かれた教育課程を実現すべく、キャリア教育の視点を基礎として、各教科等の教育内容を相互関係で捉え、教科等横断的な視点での配列や PDCA サイクルの確立、人的・物的資源などの効果的な活用など、様々な角度からカリキュラム・マネジメントに取り組むことにつながり、生徒のキャリア発達を効果的に促すことができるのではないかと考えた。

以上のことから、（３）研究の内容と方法で、具体的に示していくこととする。

（３）研究の内容と方法

ここからは、本研究の内容と方法について述べていく。

進路に関する研修会や研究協議会等の諸会議には進路指導部が参加し、校内には、資料の回覧や校内進路研修会などを通して情報提供している。また、外部講師による学習会も開催した。

校内の進路指導に関する情報提供の仕方の工夫については、次の６点とした。

①生徒、保護者用の進路指導の手引きを作成し、教職員だけではなく生徒・保護者も進路について自主的に学習できる環境整備に努める。

②企業等の業務内容を整理し、本校の作業学習との整合性を図り工程分析を行う。

③道内にある事業所（福祉サービス事業所）の情報が網羅されたパンフレット（冊子）の作成・整備・更新。

④研修部によるアンケート結果から、卒業後を見据えた進路指導について、外部から求められている生徒像の周知・還元。

⑤実習先に記入していただく評価表項目と生徒の実習日誌の項目の整合性を図り、教科等横断的な指導につながるツールの作成。

⑥巡回指導時の聞き取り用紙を統一し、学校に求められる指導についての情報収集。

このことについて、進路指導部内で役割分担しながら進めることとした。

（４）推進日程

４月　５日　全体研修①
　　・これまでの研究の振り返り及び今後の方向性について
４月 25 日　第１回研究推進委員会
　　・今年度の研究内容の確認
　　・研究推進委員会の進め方について確認
６月 10 日　第２回研究推進委員会
　　・今年度の各研究内容の確認
　　・調査研究についての概要説明
６月 14 日　全体研修②
　　・今年度の各研究内容の計画発表
10 月 16 日　第３回研究推進委員会：進捗状況の確認
10 月 18 日　全体研修③
　　・各研究内容の中間報告
２月　４日　第４回研究推進委員会
　　・各研究内容について進捗状況の確認
　　・次年度の方向性検討
２月　７日　全体研修④
　　・最終報告

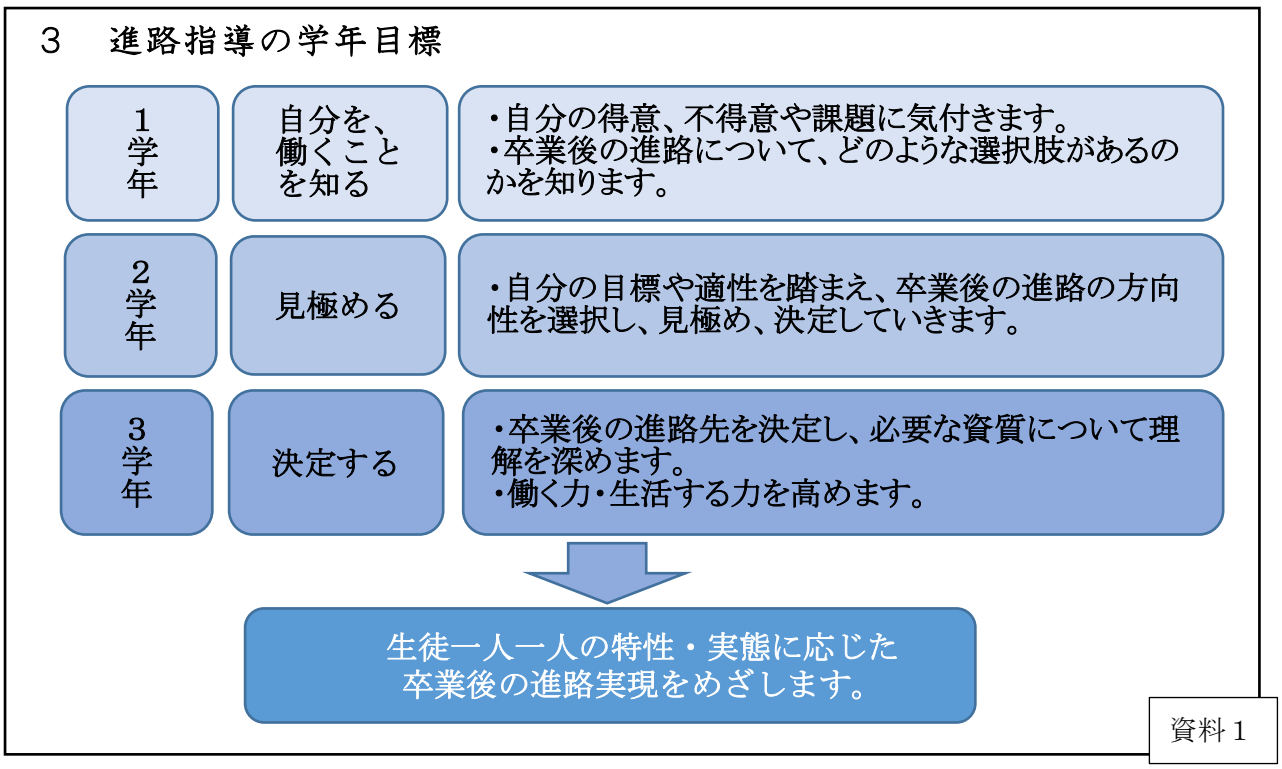
２　研究の実際

この章では、１－（３）にあげた研究方法と、実際の内容について述べていくこととする。

（１）生徒、保護者用の「進路指導の手引き」の作成

昨年度、教職員用の進路指導の手引きが完成したことから、そのデータをベースに生徒用、保護者用の進路指導の手引きを作成することとした。教職員のみならず、生徒・保護者も同じ観点や視点で進路指導に関する学習ができ、早い段階からキャリア発達を促すためのツールになるのではないかと考えた。

そこで、昨年度作成した教職員用の「進路指導の手引き」を参考に、まずは保護者用の「進路指導の手引き」作成に着手した。保護者については、定期的に進路だよりを発行していることと、進路形態によって手続き等の進め方が異なってくることから、内容については、基礎的・基本的な部分についての情報に絞ることとした。作成にあたって、他校の進路指導の手引きを参考にして作成した（資料１一部抜粋）。



資料１

完成した手引きの活用や、保護者への配布は次年度を予定している。具体的には、GW 前の授業参観「進路の学習」の教材としての活用から始める。特に、１学年時は、保護者に配布し、本校の進路の進め方や関係機関・制度の確認をする教材になる。２学年時・３学年時は、その年度や今後の流れについて確認することができる資料とすることを想定している。また、学期末の保護者懇談会資料として活用も予定する。

（２）企業等の業務内容と本校の作業学習との整合性を図り工程分析を行う

作業学習では、働く喜びの理解や働くための知識・態度・技能の育成などを目的として取り組んでいる。その成果を確かめ、生徒一人ひとりの課題を把握し、将来の見通しを考えるために現場実習を実施している。働くことの大切さや厳しさを理解することや、自分の能力・適性や課題などを理解することは、働く上で大切なことであり、職業生活の初歩的な経験を積み重ねることが、将来の社会生活への移行へと結びつけられるものと考える。その意味でも現場実習先での経験は、働くことへのイメージをもちやすくなり、作業学習との関連性ももたせやすくなる。本校では、開校時より現場実習を今金町内外で実施させていただいている。長年生徒を受け入れてくださったことにより生徒への理解も深く、生徒の特性や実態に合った作業種なども用意していただいている。現場実習は、生徒にとっては学びの機会が多く、我々教職員にとっては職業生活での生徒の実態を把握する機会にもなるため、欠かせない取り組みとなっている。

そこで、学校生活の中で現在取り組んでいる内容が、現場実習先や就労先でどのようにいかされるかを考えられるツールがあることで、作業学習に限らず様々な取り組みに具体性がもたせられるのではないかと考えた。

１学年の実習は引率実習になることから、引率者に作業工程を細分化していただくよう協力を仰いだ。内容としては、「作業内容」、「作業工程」、「留意点」、「作業学習における指導ポイント」、「各学科（教科含む）等における関連性」とした（資料２）。

資料２

実習場所：○○農園　　主な作業内容：トマトの収穫、トマトの箱折、トマトの選別　（３種類の作業内容をその日の天候や収穫状況によってローテーションして行った）

月日	作業内容	作業工程	留意点	作業学習における指導のポイント	各学科（教科含む）等における関連性
8月27日	・トマトの収穫	1コンテナを乗せたカートを移動させながら、トマトを収穫する。 2へたの上の部分のふくらみを上に押すようにしてトマトを収穫する。ひっぱるとへたがとれてしまうので無理はしない。 3黄色のコンテナには色が赤くてキズや割れのない収穫したトマトを入れていく。青色のコンテナにはキズや割れのあるトマトを入れていく。	・使い捨てビニール手袋を着用し、毎日取り換える。（衛生上、翌日同じものは使わない） ・赤いトマトを収穫する。色が薄くてオレンジ色のものはとらない。 ・へたの取れてしまったトマトもコンテナに入れて良いが、へたがとれたトマトは価値が下がるためなるべくへたがとれないように収穫する。 ・ハウス内高温となるため、適宜休憩を促す。	・トマトの色が赤かオレンジか微妙なものについては教師が確認をする。 ・ひっぱってとるとへたがとれるため、慣れるまで収穫の仕方を確認し、見守る。 ・手早さを意識する。 ・立ち仕事による体力の向上。 ・製品を扱っている意識をもつ。	自己内省：物事に対する意欲 職　　業：社会における役割理解 他者評価の受容 応 用 力：情報活用
	・トマトの箱折	１段ボールの束（仕切り含む）、シートを作業場所に準備する。 ２スズランテープを切り、それぞれを配置する。 ３段ボールの束から１枚とる。 ４段ボールの折り目に沿って段ボールの左右を折る。 ５折れ目に沿って負った段ボールの上下部を降り差し込む。 ６シートを敷く。 ７長い仕切りが上、短い仕切りが下になるよう組み立てる。 ８シートを傷つけないように仕切りをセットする。 ９組上がった段ボールを逆さまにし、仕切りが落ちないか確認する。 １０完成した箱を積み重ねる。	・慣れるまでは一つ完成するごとに確認する。 ・基本的に長時間立っての仕事 ・慣れるまでは確実性を重視する必要あり ・慣れてきたら手早さを意識させる ・シートは破れやすいので扱いに注意する ・仕切りの上下が逆にならないよう注意する ・折れ目からずれて折ると耐久性が悪くなるため折れ目に沿って折る ※○○農園では、多少の紙のやぶれは気にしないので、数をたくさん折ってほしいとのことでした。	・立ち仕事による体力の向上。 ・単調な作業による集中力の育成。 ・間違えないためのポイント習得。 ・時間やノルマの意識。 ・規格通りに仕上げる意識。 ・製品を扱っている意識をもつ。	自己内省：物事に対する意欲 課題を解決しようとする心 職　　業：社会における役割理解 他者評価の受容
8月28日	・トマトの選別	1手袋をはく（手袋はお借りした） 2ベルトコンベアーに流れるトマトを見て、へたのついていないトマト、割れているトマト、キズのついているトマトを取り除き、それぞれを決まった箱に入れる。 ３濡れているトマトは取り上げて手袋で軽くふき、コンベアーに戻す。	・機械の中には手を入れない。 （多少ミスがあっても、最後に確認があるので、あわてて機械に手を入れないように指導する。） ・目視してキズが確認できるもののみを取り除く。 ・微妙な傷は、取り上げて確認し、すぐ戻す。	・手早さを意識する。 ・立ち仕事による体力の向上。 ・見逃さない集中力の育成。 ・製品を扱っている意識をもつ	自己内省：物事に対する意欲 職　　業：社会における役割理解 他者評価の受容 応 用 力：情報活用

引率していただいた方々の協力により、全事業所分の資料を作成することができた。また、のちの項“**（５）実習先に記入していただく評価表と生徒用の実習日誌の項目の整合性を図る**”にも関連するが、各学科（教科含む）等における関連性については、今養版キャリアプランニングマトリックス（以下マトリックス）の指導観点から引用し、実習先ごとに整理した。その結果、大きく分けて「自己内省」、「職業」、「コミュニケーション」、「応用力」の４つに分類され、自己内省と職業については、全ての実習先で必要な指導観点となった。指導の柱については、「物事に対する意欲」、「課題を解決しようとする心」、「他者評価の受容」、「業務遂行能力」、「職業理解」、「社会における役割理解」、「自分から相手に発信」、「TPO に応じた意思表示」、「人間関係」、「情報活用」があげられた。

これらのことから読み取れることとして、「キャリア発達にかかわる諸能力（例）」（４領域８能力）における「人間関係形成能力」、「将来設計能力」、「情報活用能力」、「意思決定能力」のうち、「人間関係形成能力」の自他の理解能力とコミュニケーション、「将来設計能力」の情報収集・探索能力と職業理解能力、「情報活用能力」の役割把握・認識能力と計画実行能力、３領域６能力が網羅されていることがわかった。諸能力の領域と能力については、あくまでも例ではあるが、現場実習がいかに一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育てることをとおして、キャリア発達を促す教育、つまりキャリア教育に直結していることがわかる。

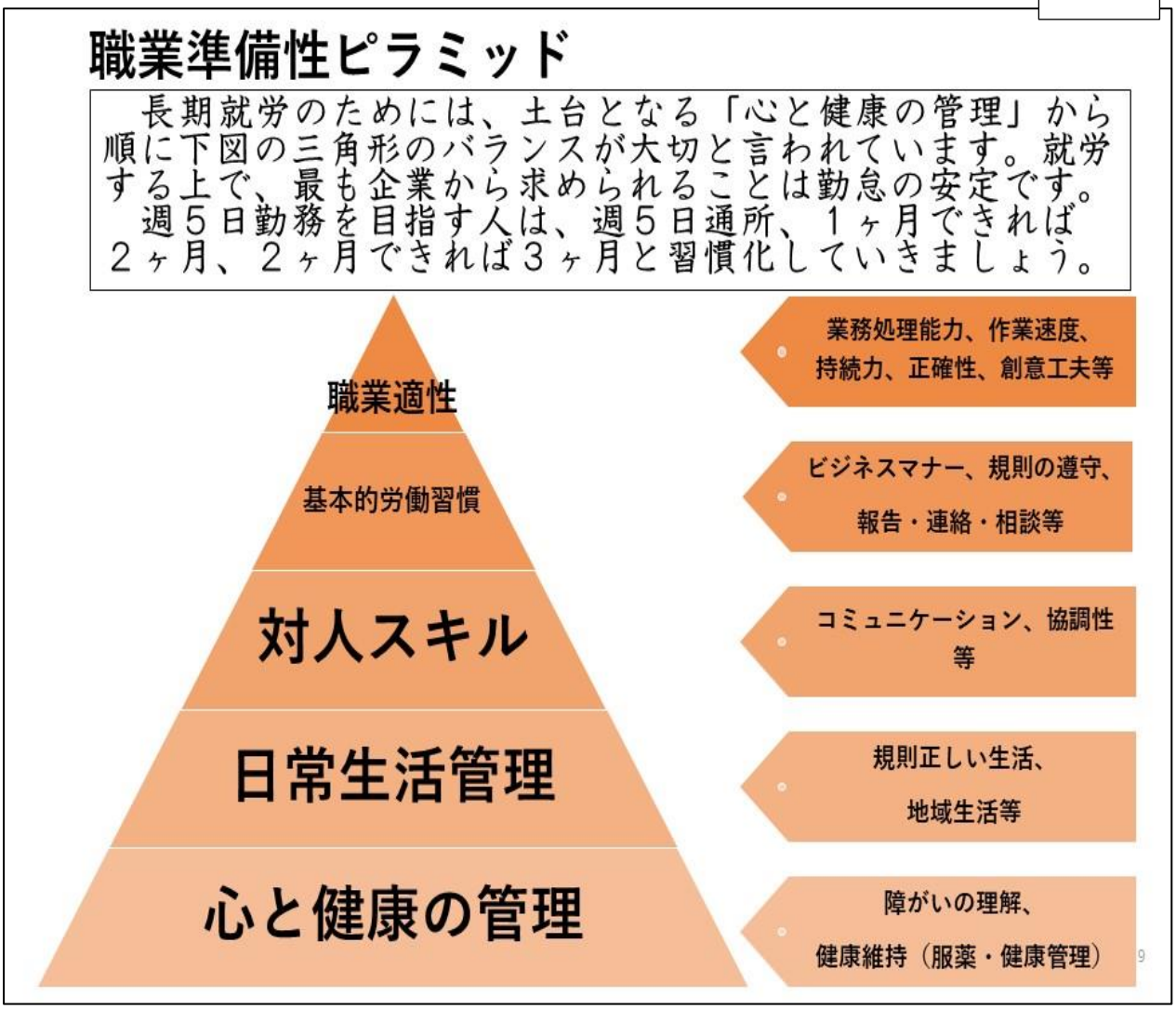
（３）道内にある事業所（福祉サービス事業所）の情報パンフレット（冊子）の作成・整備・更新

一昨年、進路福祉セミナーが実施されたが、一堂に会したことにより短時間で様々な事業所の取り組みを知ることができ、生徒・保護者にも教職員にも好評だったことから、各事業所の情報や資料を収集した。それらをもとに作成した情報パンフレット（冊子）は、職員のみならず生徒自身も図書室で目をとおしていたり、授業で活用したりする場面も多く見受けられた。また、今年度の進路福祉セミナーが８月 24 日北斗市かなで～るで実施された。本校からも 35 名程が参加し、大盛況であった。今年度も事務局の協力の下、当日各事業所が説明する際に使用したパワーポイント等のデータをいただき、情報パンフレット（冊子）の内容を更新した。また、今年度はさらに、各事業所のパンフレットを各ホームルームに一部ずつ配り、いつでも閲覧できるように工夫を図った。図書室に常設していることで活用はされていたが、ホームルームにパンフレットを置いたことで、事業所の情報をさらに得やすい環境を整えた。

（４）卒業後を見据えた進路指導について、外部から求められている生徒像の周知・還元

研修部によるアンケートの結果から、受け入れ先からどのような生徒がほしいか、学校で何を教えてほしいかなど、職場から何を求められているか知りたいといった声が多数あった。そのため、外部と関わる機会の多い進路指導部として、実習における職場からの評価、巡回時に伺った現場からの話や声などを、職員全体に周知を図ることで、授業改善につながるのではないかと考え、作成した資料を基に学習会で説明を行った（資料３　以下一部抜粋）。

資料３



（５）実習先に記入していただく評価表と生徒用の実習日誌の項目の整合性を図る

本校の現場実習において、実習日誌は生徒自身の振り返りと実習先からの評価が、課題改善や目標設定などに大変役立っている。しかし、生徒が振り返る項目と実習先の評価表の項目に整合性がなく、生徒自身が目標設定や課題改善に向けた取り組みがしにくいという現状があった。また、実習先に記入していただく評価表について、各学年の評価表が同じであることに違和感を覚えたという話が実習先からあった。

そこで、実習先に記入していただく評価表を学年ごとに改善するとともに、生徒用の日誌の項目を評価表と整合性をもたせ整理することで、実習先からの評価と生徒自身の振り返りが結びつきやすくなると考えた（資料４）。

資料４－１

3年現場実習日誌(案)

＊の部分は実習先の方の記入をお願いいたします。

月　　日（　　）　天気：　　（実習　　日目）

実習内容

時間　　分 ～　　時　　分

できた ◎　大体できた ○　あまりできなかった △　全くできなかった ×　本人　＊実習先担当者

実習業務について

自己内省	1	見通しをもち、集中して仕事をすることができた。	
	2	指示や注意を素直な姿勢で聞き、行動に移すことができた。	
知識・技術/応用力	3	時間を意識した行動・仕事をすることができた。	
	4	職場のルールとマナーを守ることができた。（忘れ物の有無、身だしなみ、お客様への挨拶、休憩時間の過ごし方など）	
	5	集団の一員として自分の役割を果たし安全に仕事をすることができた。	
職業	6	職場の一員として、指示や注意されたことの理由や内容を理解することができた。	
	7	自ら工程や課題を理解し、効率よく仕事をすることができた。	
コミュニケーション	8	状況に応じた挨拶・返事をすることができた。	
	9	必要に応じた報告・連絡・相談をして仕事をすることができた。	
	10	状況に応じた表情、態度、話し方で仕事をすることができた。（話の聞き方、返事の仕方、敬語の使い方など）	
自己設定目標			

今日を振り返って（仕事）　本人記入

＊実習先担当者　＊実習の様子・在学中に学校で取り組んでほしいこと等（記入者　　）

＊生活の様子・在学中に学校で取り組んでほしいこと等は保護者、又はグループホームの方の記入をお願いいたします。

生活について

今日を振り返って（生活）　本人記入

起床時刻	時　分	家を出た時刻	時　分
帰宅時刻	時　分	就寝時刻	時　分

＊保護者等　＊生活の様子・在学中に学校で取り組んでほしいこと等（記入者　　）

マトリックスの指導観点から引用

現実習日誌の自己内省から引用

現日誌のマナーから引用

マトリックスの知識・技術（社会の仕組み）、農業科作業日誌、マトリックスの応用力（人間関係）から新設

マトリックスの職業（他者評価）から　新設

現実習日誌のコミュニケーションから　引用

マトリックスのコミュニケーション（自分から）から　新設

卒後支援用聞き取り用紙から　引用

自己設定目標の新設

卒後支援用聞き取り用紙から　引用

卒後支援用聞き取り用紙から　引用

資料４－２

令和Ｘ年度　3学年　現場実習評価表(案)

学校名　北海道今金高等養護学校　　3年ｘｘ科　ｘｘ　ｘｘ

事業所名	ＸＸＸＸＸＸＸＸ	記入日	ｘ月ｘ日（ｘ）
		記入者氏名	ｘｘ　ｘｘ
実習期間	ｘ月ｘ日（ｘ）～ｘ月ｘ日（ｘ）　ｘ日間		
実習内容（授業内容）	ＸＸＸＸＸＸＸＸ、ＸＸＸＸＸＸＸＸ、ＸＸＸＸＸＸＸＸ		

評価・・・1できる　2いたいできる、3あまりできない　4ほとんどできない、5できない　数字に○をお願いします。また、あれば特記事項もお願いします。

	項目	具体的項目	評価	特記事項
1	自己内省	・作業の見通しをもつことができた	1・2・3・4・5	
		・集中して仕事ができた	1・2・3・4・5	
		・指示や注意を素直な姿勢で聞くことができた	1・2・3・4・5	
		・注意や指示から行動に移ることができた	1・2・3・4・5	
2	知識・技術／応用力	・時間を意識した行動・仕事ができた	1・2・3・4・5	
		・職場のルールを守ることができた	1・2・3・4・5	
		・職場のマナーを守ることができた	1・2・3・4・5	
		・他者と協力して仕事ができた	1・2・3・4・5	

1　　ウラに続く

マトリックスの項目から　引用

マトリックスの各項目の学年目標、新実習日誌から　新設

書式は大きく変更をかけないことで、混乱を最小限に抑える工夫も行った。

（６）巡回指導による聞き取りから学校に求められる指導

今まで卒後支援の巡回指導は、状況を文書にまとめ共有のデータベースに保存していた。その内容は、分掌部会で報告したり、教職員の進路コーナーに掲示したりして情報の共有を図っていた。しかし、書式が決まっていなかったことから、聞き取る内容に個人差があったり学校現場に還元できる内容が聞き取れなかったりしていた。

そこで、聞き取り用紙を作成し、巡回時に統一した内容で情報を得ることで、巡回者が代わっても個人差が出ないようにした。また、学校に求められる卒業までに身に付けてほしいことなども加えることで、学校現場に還元できるのではないかと考えた（資料５）。

卒後支援聞き取り用紙　　資料５

進路指導部　　担当：○○　○○

●卒業生氏名：

●職場：

●訪問日：

●最近の様子

●現在、問題になっていること

●在学中に学校で取り組んで欲しいこと

●備考

次に、３章で成果と課題について触れていく。

３　成果と課題

この章では、研究の各項目についての成果と、課題を述べる。

（１）生徒、保護者用の「進路指導の手引き」の作成

まずは、保護者用の資料を、初任段階層などの学習会で活用した。15 分間という限られた時間の中での説明であったが、要点がまとめられており、入学して間もない生徒の保護者に対して、進路指導の知識を得るための最初の資料としては一定の成果が図られるものと感じることができた。今後、さらに内容を精査してより良い物が完成するよう努めていきたい。

生徒用の進路指導の手引きについては、他教科・他形態との整合性を図る必要性があったことから、今年度については作成を見送った。生活単元学習及び総合的な学習・探究の時間において、現場実習の単元や進路についての単元があることから、進路指導の手引きや単元学習帳の内容を精査し、次年度以降の完成に向け準備を進めていきたい。

（２）企業等の業務内容と本校の作業学習との整合性を図り工程分析を行う

現場実習引率者に作業工程を細分化していただき、作業内容、作業工程、留意点、作業学習における指導ポイント、各学科（教科含む）等における関連性について整理を図った。その中で、「キャリア発達にかかわる諸能力（例）」（４領域８能力）における「人間関係形成能力」、「将来設計能力」、「情報活用能力」、「意思決定能力」のうち、「意思決定能力」の選択能力と課題解決能力が網羅されていなかった。裏を返すと、引率者がいる中での実習であったことから、生徒自身が自己選択する場面は設定しにくい状況であることが伺える。また、課題解決の

ために目標設定を行っているが、終始目標を意識した取り組みを継続することの難しさや作業種によって目標が合わない状況があることも要因の一つと考える。また、今回の工程分析は１学年で行ったが、２、３学年では単独での実習が入ってくることから、否が応にも選択と課題解決を求められる場面は出てくると考える。

現場実習にかかわらず、各教科等さらには日常の生活から「選択」と「課題解決」ができるような取り組みが必要である。具体的には、シラバスを活用した目標の明確化や評価の活用、指導内容表を活用した適切な目標設定、指導、評価、個別の指導計画等への活用などが考えられる。相互に関連させ、それらの成果を発揮する場として現場実習などの行事が設定されることが理想と考える。その意味からも、それぞれの計画や評価などを一つ一つ整理し活用していくことが、教科等横断的な取り組みにつながることを日常から意識し、将来を見据えてアプローチしていくことを心掛けたい。

（３）道内にある事業所（福祉サービス事業所）の情報パンフレット（冊子）の作成・整備・更新

取り組みの結果として、学校内では、進路セミナーに参加していた事業所に興味関心を示している生徒が増え、事業所の雰囲気など、情報パンフレット（冊子）だけでは読み取れない内容の質問をしてくる生徒が増えた印象を受けた。図書室に冊子を置いただけではなく、各ホームルームに全事業所のパンフレットを置いたことが成果として現れたのではないかと考える。

昨年の研究紀要には、この情報パンフレット（冊子）について、『さらなる活用ができるよう、グループホームの空き状況の更新、定員などの情報も盛り込んでいきたい。また、今後も継続的に行っていくことで考えている進路セミナーだが、各事業所からの情報の統一化が図れるよう、データベースの書式を各事業所に配布し、記入していただくことで進めていきたい。内容については、「平均工賃」、「ステップアップに向けたプログラム」、「独自の特徴」など、生徒や保護者が知りたいと思われる項目も関係者で相談しながら増やしていきたい。』と記載していた。しかし、震災の影響で進路セミナーの開催が中止になったこともあり、依頼するには至らなかった。

これらのことを受け、今後は、さらに知りたい情報を盛り込んだ内容に改訂していくことを目指し、書式の整備を進め協力依頼をしたり、ハローワークからの情報を基に、企業に関する情報が得られるような工夫を図っていったりしたいとも考えている。

（４）卒業後を見据えた進路指導について、外部から求められている生徒像の周知・還元

外部からの声を中心とした内容の学習会であったが、特に興味・関心が強かったのが実習先からの生徒の評価であった。５日間という短い実習期間であっても、学校で課題となっていることを指摘されていたり、日常の生活の中で見過ごしていたことを改めて実感させられたり、一定の成果があったと考える。

研修部と連携を図り、進路に特化した学習会を２回実施したが、その結果について、研修部にアンケートを作成していただき、成果と課題をまとめた。

（１）どの校内学習会に参加されましたか。

①	２回とも参加した	13 名
②	７月　拡大校内学習会	19 名
③	９月　校内学習会	3 名
④	不参加	3 名
⑤	未記入	3 名

（２）参加して得られた知識や考え方は、いかがでしたでしょうか。

①良かった	31 名
②もっと聞きたい内容があった	2 名
③やや不十分	0 名
④ためにならなかった	0 名
⑤未記入	4 名

（３）具体的にためになったことはどのようなことでしょうか。

＜学校＞
・進路先の具体的な企業名や仕事内容（定着率が気になる）
・卒業生がどんな進路に進んだのか分かった
・外部から求められている生徒像
・こんな人が一般企業で働けます！！10 の項目
・進路の進め方
・事業所関係
・他校のことや本校の進路マニュアルができたこと
・進路指導は押さえておくべきことが多く、経験が少ないと分からないことが多い
・企業、事業所が求めている人材について知ることができた
・ひと昔前とは状況が変わったことを知り、今後の指導を考えるきっかけにできた
・自分には見えないことが分かった

＜寄宿舎＞
・様々な考え方や今後の生活指導にいかせる話が聞けた
・企業側からの在学中に学ばせてほしい内容
・卒業後の様子や仕事の継続率を知る機会になった
・卒業後の生徒の様子が分かった
・卒業した生徒の実情と生徒に必要なスキル

（４）現在、お悩みになっている進路指導についてお聞かせください。

＜学校＞　回答者９名
・実習先の評価の伝え方
・進路に向けての生徒のモチベーションの指導
・職場開拓に関して
・卒後支援に関して
・やりたいことが見つからない生徒に将来を見据えた指導が難しい
・進路の方向性の統一
・足並みをそろえること
・実習に参加しない生徒をどうしたら良いか
・保護者との連携
・世の中にある職業がよく分かっていない生徒に対して、どのように興味をもたせて、進路決定につなげていけば良いか
・（担任の先生方を見て）継続した進路指導の充実の難しさ

＜寄宿舎＞　回答者５名
・登校意欲のない生徒の進路指導
・企業側への不信感の払拭などの対応方法
・生徒や保護者の要望と実態の違い
・本人が希望している業種と進路先がマッチングしない場合の対応
・就労意欲のない生徒へ就労意欲をもたせる方法

以上により、進路指導に関する学習会は、興味・関心が高いことを改めて感じることができた。企業や事業所からの声を周知することで、学校での取り組みが間違っていないことを実感できたり、現在の取り組みをさらに深化させていくことにつながったりするきっかけになるのではないかと感じた。このことが、学校全体で授業改善につなげられるのではないかと考えている。

また、進路指導に関しては悩みがつきないことがアンケート結果からも読み取れる。現在、道南の特別支援学校９校では、各校の進路指導部が連携を図り、常に現場実習や進路に関することなど、幅広く情報共有している。進路指導連絡協議会の中でも、各校同じような悩みを抱え、試行錯誤しながら生徒指導や進路指導に務めていることが実感できる。そこで、各校で意見を出しても協議する土壌に上がらないこともあり、道南特別支援学校の意見として報告したところ、状況が大きく変わり、道南の意見が反映された内容が非常に多い全道進路指導連絡協議会になった。

本校でも意見を出し、共有し、学校内で解決できないことは他校の取り組みなどを参考にしてより良い教育につながるような取り組みをしていきたい。さらには、主体的・対話的で深い学びに繋げるために、我々教職員が、日常から主体的な業務推進をしたり、生徒の手本となるような言動を心掛けたりすることも必要と考える。大人の発信や行動の影響力は計り知れないこと、生徒にとって最も身近なキャリアであることの自覚を持ち、振る舞っていくことこそが求められる生徒像の育成につながるのではないかと考えている。

（５）実習先に記入していただく評価表と生徒用の実習日誌の項目の整合性を図る

卒業後の進路選択をしていく中で、就労継続支援Ｂ型事業所の利用が適切だと考える生徒がいるが、学校卒業後すぐに就労継続支援Ｂ型事業所の利用は制度上できなく、就労アセスメントが必要になる。就労アセスメントについては、就労移行支援事業所や障がい者就業・生活支援センターなどに協力をいただき、本人の働く力を見ていただき、就労継続支援Ｂ型事業所の利用が適切であるかどうかを判断していただくことになっている。このことについて、道南の進路指導連絡協議会や自立支援協議会などが協議を重ね、２学年時の実習（一般企業や就労移行支援事業所）を就労アセスメントの代替えとすることが可能になるように書式の統一を図った。資料作成については学校が行うことになり、その中の実習評価表は学校、事業所、行政が書式を統一して浸透を図ることとなったが、就労移行支援事業所で行う就労アセスメント時に使用する評価表を基にして作成した。その結果、①アセスメント必須事項、②週間スケジュール、③２学年時の企業及び就労移行支援事業所による実習時の評価表の３つの書類を提出することでアセスメントの代替えとすることができるようになり、就労移行支援事業所のない地域にとっては、大変ありがたい取り組みとなっている。

さて、昨年度の調査研究での反省の中に、現場実習の評価表と生徒用の実習日誌それぞれの項目について差異があり、スムーズな振り返りができないことがあげられていた。前述したように、２学年時の実習の評価表が就労アセスメント代替えの必要書類となったため、学校独自で手直しすることはできない。さらに、実習先からは、全学年同じ評価表では変化が見えにくいのではないかといった話があがった。

そこで、まずは３学年で使用する生徒用の実習日誌と評価表の項目の整合性を図り、PDCA サイクルがスムーズに行えるよう工夫を図った。実習日誌については、マトリックスの指導観点、作業日誌の自己内省、現実習日誌などから引用した。また、評価表は、マトリックスの指導の柱、各学年段階目標、アセスメント時の評価表から引用し、新実習日誌から新項目を新設した。

新評価表の評価項目数は、実習先評価者の負担に配慮して現状数を参考にした。また、大項目やその具体的項目はマトリックスの指導の柱や学年段階項目を基にした。

現評価表の項目は、「身だしなみ」「ルールの理解」「自己管理の状況」「自己統制力」「会話・言葉遣い」「作業上の報告・連絡」「協調性」「準備と後片付け」「集中力の維持」「作業能力の向上」「指示内容の理解」「作業の正確性」「巧緻性」「時間の区別」「体力（持久力）」「作業意欲」「援助の要請」の 17 項目であった。一見すると働く上で求められている項目ばかりであるが、その内容がキャリア発達段階の「社会生活や将来の職業生活の基礎的内容を学ぶ段階」に沿ったものが多く、発展的内容を学ぶ段階に沿っていないものも見受けられた。そのため、マトリックスを参考に難易度を少し上げることにした。

マトリックスの指導観点は、「心と体」「自己理解」「自己内省」「知識・技術」「職業」「コミュニケーション」「応用力」となっている。また、指導観点にはいくつかの指導の柱が設定され各学年の段階も設けられている。その指導観点の中で３年現場実習評価表に適した指導観点として「自己内省」「知識・技術」「職業」「コミュニケーション」「応用力」を選出した。ただし、「応用力」は難易度が高すぎると判断したので「知識・技術」と合わせて「知識・技術／応用力」とした。

それぞれの項目の具体的項目は、下記のようにまとめた。

①「自己内省」では、作業（仕事）を行う上での見通し・集中力・態度を図ることを求めた。

②「知識・技術／応用力」では、作業（仕事）を行う上での時間・ルール・時間管理・他者との協力・役割理解・安全配慮。

③「職業」では、注意理解・工程理解・効率的作業。

④「コミュニケーション」では、挨拶・返事・報告・連絡・相談・他者との意思疎通と本校生がもっとも苦手とするものを求めた。

①～④のように、それぞれの具体的項目をマトリックスに沿ってまとめることで項目が 17 から４となり、具体的項目が 19 から 18 となり、整理がなされ、さらに難易度を上げることができた。

新実習日誌は、マトリックス以外からも関連する項目を取り入れた。内容としては、現日誌の項目は、「マナー」「コミュニケーション」「自己内省」「応用力」である。その中の「自己内省」は、マトリックスの指導観点にもあるのでそのまま利用した。その他は、評価表と同じく「知識・技術／応用力」「職業」「コミュニケーション」とした。「自己内省」の説明文は現日誌のものを利用して見通しや指示理解を確認するものとした。「知識・技術／応用力」の説明文は、旧日誌のマナーやマトリックスの知識・技術(社会の仕組み)、農業科作業日誌、マトリックスの応用力(人間関係)から引用して時間の意識・ルール・マナー・自分の役割を新設した。「職業」の説明文は、マトリックスの職業(他者評価)から指示や工程の理解・仕事の効率を新設した。「コミュニケーション」の説明文は、多くは現実習日誌のコミュニケーションから引用したが、一部マトリックスのコミュニケーション（自分から)から状況に応じた表情・態度・話し方を新設した。また、自己設定目標を新設して自己目標を意識させることとした。最後に、実習担当者・保護者等の記入欄に卒後支援用聞き取り用紙から「在学中に学校で取り組んでほしいこと」を引用して教育活動への希望を集めることにした。

評価表と日誌を改定したことについて、活用した教諭の感想を以下にあげる。

現場実習の日誌は、マトリックスの内容が含まれており、仕事の自己評価をする上でわかりやすいものだった。特に、企業の方に書いていただく評価表と項目がリンクしていたため、事後学習の面談等で活用しやすかった。ある生徒は、普段は課題に対する指摘に対して、理解ができないことが多かったが、日誌の自己評価と評価表と見比べることで、自分の評価と企業の評価の違いが視覚的に分かり、課題を理解することができた。また、評価表に書かれているコメントを読み、実習中に言われたことを思い出すことで、面談後の行動が大きく変わり、就労を意識したものに変化していった。口頭での指摘が伝わりにくい生徒には、大変効果があるものであると考えられる。

評価の仕方については、日誌が〇や×の記号、評価表が１～５の数字と違いがあった。日誌も評価表と同様に数字の評価にすると、より視覚的に分かりやすくなるのではないだろうか。

実習担当者と保護者の記入欄に「在学中に学校で取り組んでほしいこと」という項目を入れたことは、ホームルーム担任としてとてもありがたかった。

理由としては、まず実習担当者の記入欄については、直接職場の方と話をする機会はあるが、その都度日誌に残してもらった方がより具体的な成果や課題について職場目線での声が確認でき、学校生活にフィードバックしやすいと考える。また、次にその職場を希望する生徒がいた場合、事前学習などにも活用できると考える。次に保護者の記入欄については、寄宿舎生活や帰省時の生活とは違う就労生活の形で生徒と過ごすにあたり、普段は見えない様子（より社会に出るときと近い姿）を観察する機会でもある。そのため、「在学中に・・・」と明記することで保護者も課題や困っていることを書きやすいと考える。その結果、保護者と教員が課題等を共通理解でき、より生徒の成長のためになると考える。

以上より、評価表と日誌の改定は、一定の評価が得られたのではないかと考える。今後は、日誌と評価表の表記方法の統一を図り、振り返り等がさらに行いやすくなるよう整備していきたい。また、活用する中で、「確認」、「丁寧さ」、「手早さ」など、基本的な取り組みの姿勢について評価や振り返りがしにくくなることが浮き彫りとなった。働く上で基礎・基本的な姿勢は常に必要となり、それらができている卒業生が、就労継続・定着できているケースが多いことから、基礎的部分と応用的部分のバランスを取りながら改訂していく必要があると考えるので、１学年の実習日誌と評価表の改訂にも着手しながら、全学年の評価表と日誌を総合的に整備していきたい。

（６）巡回指導による聞き取りから学校に求められる指導

作成した巡回指導での聞き取り用紙を使用し、職場から聞き取った内容を以下にまとめた。

●現在、（企業や福祉事業所で）問題になっていること

1. 報告・連絡・相談や自分では終わったと思っている作業も不十分である。
2. あいさつの声が小さい。
3. 体調不良で休みがちである。
4. 他の利用者と適切なコミュニケーションを持てない。
5. 自分の仕事が終わったら他の職員が作業していても勝手に休んでいる。また、先輩を呼び捨てにすることがある。
6. 自閉症に伴うこだわりが見られる。
7. 不安なこと（人間関係等）があると考えすぎて、送迎車から降りられない。
8. 始業時間を守らない。(始業時間になってから準備を始めるため始業に遅れる)
9. 慣れてきたのか見ていないときは手抜きが見られる。他の利用者との関係が良好とはいえない。
10. 自分で次の日の準備を考えることができない。事業所から次の日の持ち物連絡が必要である。
11. 大人しいからか、なかなか自分から質問できない。

●在学中に学校で取り組んでほしいこと

1. 実際に学校に授業見学に伺ったが、その時の先生方の助言を参考に工程表を用意したが、作業パターンが多くなっている。そのような場合も対応できるようにしてほしい。
2. 大きな声のあいさつを身に付けさせてほしい。
3. 体調管理を徹底させる。
4. 対人面が苦手でも質問には答えられるように指導してほしい。
5. もっと社会常識を教えてほしい。
6. 物事の変更や環境の変化の受け入れができるようになってほしい。
7. 不安になったときにどうすればよいかを本人なりに用意しておいてほしい。
8. 時間を守ることを教えてほしい。
9. 最後までしっかり作業するように指導してほしい。
10. 授業でも次の日の持ち物を考えさせてほしい。
11. 朝のあいさつを聞こえる声でできるようにしてほしい。
12. 質問する勇気や経験を持たせてほしい。
13. 発信力ではなく受信力を高めてほしい。

卒後支援聞き取り用紙を統一したことで、職場からの声を情報として確実に集めることができた。この情報をまとめることで、今現在の学校に求められる指導をさらに洗い出すことができた。学校の活動の中ですぐに取り入れられるものや、時間を掛けて改善を図っていくものなど、様々なものがあるが、一貫していることは、会社や事業所にとってなくてはならない存在になってほしいと思っていることではないかと考える。また、まとめた情報を精査し、前項の**（２）、（４）、（５）**に反映し続けることで、新しい時代に必要となる資質、能力の育成の「何ができるようになるか」を明確にしていく必要があると考える。今後は、職場の声を項目ごとにまとめ、在学中の指導ポイントにつなげられるよう整備していきたい。

４　まとめ

研究主題のサブタイトルにある、「新しい職業学科として社会に開かれた教育課程の構築」を行っていくために、教員の就労に対する知識や認識の向上や意識改革、就労先から求められる人物育成や障がいに対する専門性の向上を目指し、１年間学校内でできることに取り組んできた。

昨年度新たに作成した掲示板について、全職員が関係する内容の掲示物が概ね好評だったことから、卒業生の動向、研修会の案内などについて継続して掲示した。昨年度の反省で掲示の「煩雑さ」があげられていたので、項目ごとに表題をつけることと、コンパクトさを心掛けた。また、進路指導部員で煩雑さを解消するために、「掲示板担当」、「書庫担当」などの役割分担を行ったことで、些細ではあるが業務の平準化を図ることができたと考えている。そういった積み重ねが、学校全体の取り組みに良い効果を与えると信じて取り組んでいる。今年度の調査研究については、前項目の結果からみても、一定の成果が得られたのではないかと考えている。

さて、キャリア教育の視点には、PDCA の考え方は欠かせないが、「check」や「action」よりも「plan」や「do」に焦点を当てがちである。しかし、外部からの声や卒業生の困り感などから読み取れることとしては、自己での振り返りはもちろんのこと、外部からの評価を受けて振り返りを行うことで、新たな課題解決に向けた積み重ねが行いやすくなる。さらに、日常の学校・寄宿舎生活にフィードバックする作業を丁寧に行うことで、卒業後を意識した生活につなげやすくなるのではないかと考える。そもそも本校で協同学習に注目したのは、「コミュニケーション能力の不足」や「障がい受容の不足」など、就労先からの本校への要望、つまりは外部からの評価がきっかけとなっている。協同学習を行うことで、コミュニケーション能力の向上や困難を乗り越える力を育てることにつながるなど、効果が期待できることから取り入れた経緯がある。社会に開かれた教育課程を実現するために、我々教職員が地域の中でいかに恵まれた環境に置かれているかを再認識し、地域の声を聞いたり取り入れたりする機会を積極的に設けていく必要性も、外部と関わる機会の多い進路指導部だからこそ思うところがある。巡回記録や現場実習評価表も、まさに人的・物的資源の効果的活用そのものに直結している。そういった意味からも、「評価」と「振り返り」と「検証」による「check」の部分が充実できるよう整備等に努めていく必要がある。そこから「改善」の「action」につなげていくことで、社会の中で自分の役割を果たしながら「自分らしい生き方」を実現するための礎を築けるのではないかと考える。現場の声を様々な角度から学習活動に取り入れることが、社会に開かれた教育課程につながり、地域の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントにもつなげられると考える。

また、本校では、キャリア発達を促す一つの手段として協同学習に継続して取り組んできている。話し合いや助け合いを中心とした授業に取り組むことで、自ら学び､自ら考え、主体的に判断し、問題を解決することなどにつながると考えている。成果として、コミュニケーション能力の向上など、就労先や地域の方々からも生徒の具体的な変容について話を聞くこともできた。課題としては、協力することの必要性について理解を深めることができるが、生徒の実態によってはそれぞれの役割を果たしきれない場面が見られることがある。本校のキャリア教育の定義として、『簡単に解釈すると、「キャリアとは生涯において個人が役割を果たす中で積み重ねていくもの」と言える』とある。個々のキャリアは、様々な環境の中で自分が果たすべき役割が変わっていき、その都度経験を積み重ねていく中で「自分」が作られ、自分らしい生き方を実現することにつながるものと考える。つまり、様々な環境での経験を個として積み重ねる必要があるのではないだろうか。協同的な場面と主体的な場面を協同学習で効果的に取り入れることで、社会に貢献できる人材の育成につながるのではないかと考える。

最後に、「キャリア発達にかかわる諸能力（例)」（４領域８能力）について述べていきたい。「４領域８能力」については、生涯を通じて育成される能力という観点が薄い、固定的にとら

えられている場合が多いなど、いくつか課題が指摘されている。その課題を克服するため、中央教育審議会では改めて分析を加え、「分野の職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力」として新たに「基礎的・汎用的能力」を示し、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力の 4 つの能力が示された。それぞれ独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にあることが重要であり、これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかを、学校や地域の特色、生徒の発達段階などによって具体的な能力を設定し、工夫し実践を通し生涯にわたって達成していくことが大切である。つまり、高校までのキャリア発達を支える能力の育成だけではなく、将来を見据え社会人として実際に求められる能力の長期的な育成を目指す必要があると考える。前の項３−（２）でも記したが、現場実習にかかわらず、各教科等さらには日常の生活から生涯にわたって能力を育成し続けるために、目標の明確化や評価の活用などを効果的にサイクルさせ、相互に関連させることで将来を見据えた教科等横断的な取り組みにつながると考える。

今養版キャリアプランニングマトリックスについても、３学年段階の次に生涯を通じた観点での段階を新たに設けるなど改訂することで、新学習指導要領の理念に沿ったキャリア教育が推進しやすくなるのではないだろうか。それが、「社会に開かれた教育課程」と「地域の特色を生かしたカリキュラム・マネジメント」を密接に関連させられるツールとなるのではないかと考える。

今後も、北海道今金高等養護学校でのグランドデザインをベースとした取り組みが、生涯を通じた能力の育成や社会に貢献できる人材の育成につなげられるよう、進路指導部として一翼を担い続けていきたい。

作成者：金子亘喜・山本拓郎

別記様式１

「北海道今金高等養護学校のグランドデザイン」

「学校教育目標」

豊かな心とつよい体をつくり　生涯にわたって自立し　たくましく生きる生徒を育てる

「（高等部）キャリア教育目標」

３学年：就労に必要な知識・技能・態度を高め、卒業後の職業生活と自分らしい生活の在り方を自己決定できるようになる。
２学年：職業生活に必要な知識・技能・態度を身に付けるとともに、生涯続けられる自分にあった仕事を考え、働くことや生活していくことについて、具体的なイメージを持てるようにする。
１学年：自己理解や他者理解を深め、自立生活に必要な知識・技能・態度を身に付けるとともに、働くことの意義を理解し、意欲を持てるようにする。

豊かな人間性

・「つよやさweek」を各学期で実施し生徒の困り感や悩みを聞く取り組みを特別支援教育コーディネーター中心に（2学期以降他職員も）実施
・研修部主導で協同学習を進めながら授業の実践をすることで、生徒の育成すべき資質・能力を踏まえ目標や内容の見直し

健康・体力

・働くために必要な健康、体力を培うために体力つくりの実践
・町内会と連携したマラソン大会の実施
・役場会や今金町役場と連携し各種大会への参加
・給食指導を通した栄養指導の実施
・地域資源（外部講師）を活用した健康教室、運動教室の実施

資質・能力の育成

何ができるようになるか

○学校教育の基本

（育成を目指す資質・能力）
生きる力の育成
○人生を拓く豊かな学力と働く力
○豊かな心や創造性の涵養
○健康で安全な生活と生涯スポーツ
○自立活動の指導

何が身に付いたか

○学校評価を通じた学習指導の改善

○　学習評価の充実
・生徒のよい点や可能性、進歩の状況などについて積極的な観点別学習状況の評価
・各教科・領域の単元の指導計画のシラバス作成と充実
・観点別学習状況の評価に基づいた目標・内容・方法の改善
・３年間の系統性のある教育課程の編成・実施・評価・改善

子供の実態

・寄宿舎生活を送る生徒が多く、自宅から通う生徒もいる。生徒に中には児童養護施設から通う生徒もいる。
・生徒の障がいの多様化、家庭状況の多様性があり、生徒の生きる力の獲得と就労支援が必要である。

子供の発達をどのように支援するか

障がいの状態に応じた子供への支援

○生徒の調和的な発達を支える環境の充実
・教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるための学級経営の充実
・生に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスの充実
・生徒一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの充実
・生徒が自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し、将来夢を充実した学校生活の実現に基づいた現在及び将来における自己実現の構築
・キャリア教育の充実（ワークキャリアアップとライフキャリアアップ）
・年間行事の改善・充実と指導体制の在り方の検討と確立
・地域の社会教育や体育・文化活動サークル活動への参加（学校・家庭含）

目指す子供の姿

・希望に向かって努力しやり遂げる生徒
・健やかな体をつくり安全に留意して生活する生徒
・人と適切なコミュニケーションができる生徒
・自ら視野を広げ、豊かな心を持つ生徒
・働く喜びを知り、社会に貢献できる生徒

何を学ぶか

○教育課程の編成

（教科等を学ぶ意義、教科等間・学校段階のつながりを踏まえた教育課程の編成）

○教育等横断的な視点からの教育課程の編成
・言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の育成
・豊かな人生の実現や社会等を乗り越えて次代の社会を形成するなどの現代的な諸課題に対応した資質・能力の育成

○カリキュラム・マネジメント
・学校教育シラバスにおける教育と指導の重点が学年・学科・分掌・各委員会・事務の計画に関連付けられ、計画的・組織的構成に基づいた学校教育・学年・学科等の評価系統による評価の充実
・各教科・領域等の単元の指導計画（シラバス）の実践状況の評価に基づく改善

どのように学ぶか

○教育課程の実施

○主体的・対話的で深い学び
・中等教育スタンダードの「協同学習」の充実（実践活動の充実）
・「資質・能力育成・資質・能力」を意識した授業、各教科等の見方や考え方の育成（深い学び）
・教科等横断的視点による授業を研究し関連付けたより深い授業（教科とキャリア教育・多様な生活学習・特別活動・自己活動等との関連付けた授業）
・多様な力の育成を図るための実践活動（ホームルーム・学年・学科の学習活動の展開、各種の体験的な教育活動の整備
・授業改善の充実
・ＩＣＴ、教材教具や教室、視聴覚教材や教育機器などの活用
・年間による学習内容の充実や振り返りの充実（「１日目」など毎日の計画と振り返りの実施）
・３年間における学習内容選択授業の充実（各教科等の特徴に応じた体験活動の重視）

実施するために何が必要か

○指導体制の充実、家庭・地域との連携・協働

（教育課程の改善と学校評価等、教育課程外の活動との連携等）

○カリキュラム・マネジメント
・校務分掌に基づき教職員が役割を分担し相互に連携しながら実施する学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメント
・教育課程の編成・実施・改善と関連付けた学校評価

○家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携
・学科共通作業（町内会正常物仕分け作業、公共施設の環境整備、総合福祉施設での早いす清掃、レクの補助）～高齢者との交流
・学科共通作業（認定こども園、小学校の環境整備等、縦すきと卒業証書制作〔小〕や廃棄体験〔中〕、食品加工〔高〕）
・合同花壇整備、商品開発（高校との計画的な交流及び共同学習）（商品開発はH30未実施）
・地域グループワーク（地域イベントの企画・運営・参加）
・現場実習、個別実習（企業等でのインターンシップ、自宅や共同生活援助（グループホーム等）などを利用してのインターンシップ）

○地域の教育支援教育のセンター的機能の充実
・ＰＴＡ等の検討、視察参加、子育てスキルアップ新学習会への参加

安全・安心を守る

・障害者差別解消法を踏まえた教職員の適切なかかわりや、いじめ・体罰防止に関わる取組（意識改革に伴わる取組、環境整備等）
・学校における危機管理（事故防止、救急体制、災害対応、不祥事の防止等）

開かれた学校づくり

・共通作業種で回収物の仕分け作業、書いす清掃、公共施設の清掃活動、レク補助、認定こども園の運動会応援等補助などいろいろな作業を外部の方と実践
・機械株式会社、ふるさと納税品の取り組み、近隣小学校、中学校へ作業体験活動実施
・交流及び共同学習の実施
・オープンウィークや地区祭の学校見学などを積極的に受け入れ、生徒の取り組みや学習内容などを知っていただくなど、地域資源の積極的な活用
・学校教職員、学校見学会、教育相談等の充実（生徒の活動を増やし、受け入れ体制の充実）

参考：©髙木展郎　2017学校のグランドデザイン・縦版